

第十九章 魔王の迷宮

1

「あれがフローシティー『イーバ』か？」

「『ウィーバ』だ」

「ここからの眺めじゃ、大きさが把握できないなあ」

「一辺が二キロメートルといえば、皇居がすっぽり入る
広さだな」

「皇居なんて行ったことないよ。せいぜい武道館止まり
だ」

「東京デイズニーランドだつて入るぞ」

「すっぽり？」

「デイズニーシーを含めても、まだまだ余裕がある」

「そいつはかなりの広さじゃないか」

雛田はようやく実感できた。

「だからさつきからそう言ってるだろ。まったく、お前の
新し物嫌いは筋金入りだな。最新情報は逐一頭に入れ
ておくと、いつも言ってるだろ」

見た目だけは可愛いPAIのカバ松が、液晶画面の上
でその短い尻尾を振りながら、鋭い言葉を切り返す。

「そんなにスゴいものなのか？」

「物知らずも極まれりだな」

カバ松はP A Iでも、口調だけはかつて一世風靡した漫才コンビ、カゲヒナタの相棒である影松豊にそっくりである。それだけに雛田にとって腹立たしくもあるが。

「遊園地があることくらいは知ってるさ」

「ドームだ。芸能界に身を置いてるなら、コンサート会場にもなるW I B Aドームを知らないでどうする。俺は建設前に一度、視察に訪れたことがあるんだぜ」

カバ松は自慢げに鼻の穴を広げた。

「お前じゃなくて影松がだろうが」

「そんな話はいい」カバ松はふいと横を向くと「要は、あそこがいま、リアルたちの集合場所になりつつあるということだ」

「空に浮かんだ変な文字のことだな」

「テレビやネットニュースが報道したせいで、日本中、いや世界中にW I B Aの名が知れ渡ったことだろう」

「清香もきつと向かっている。俺たちもこれからそこへ乗り込むわけだ」

雛田は背中に夕陽を浴びつつ、自分の陰がW I B Aのある湖へと伸びていくのを眺めていた。

京都と滋賀の県境を琵琶湖側に少しばかり入ったところ。ここからは近江舞子が遠目にもよく見える。

「ところが、そうはいかない」

「どういうことだ？」

「WIBAの周辺一帯は、湖面も含めて立ち入り禁止区域に指定されちゃった。例のリアルキラーズとかが、いち早く封鎖しちまったんだとさ」

「リアルキラーズか。考えてみりゃあ、笑える名前だな、さつき車載テレビで特集番組を観たが、寄せ集めの連中だそうじゃないか。京都の大学でもリアルにはまんまと逃げられて面目丸つぶれだった。番組もどっちかといえば、堂々と進駐してくる米軍を頼りにしようなんて口振りだった。どうなるのかね、この国は」

雛田はハハハと力なく笑った。

「笑っちゃいられんぞ。どちらにせよリアルが標的なんだ。清香に身に危険が迫ってることには違いないんだからな」

「そうだそうだ、もちろんそうだと」

雛田はウンウンと頷く。

「じゃあ、そろそろ出発するか」

カバ松が雛田の尻を叩いた。

「しかしなあ……あの親子、どうにかならんモンか」

雛田がため息をついたのは、炎とその母親のことである。エンドレスの親子喧嘩のことである。もつとも息子が一方的に悪態をつき、責められて母親が泣き言を言い

募るといふ図式は変わらない。

「最悪のクソガキだな。必死で治療方法を探してくれた親の立場がないよ」

「いや、あれは母親もヒドい」カバ松がまた鼻の穴を広げた。憤慨した時にもそうなる。「車椅子になるベッドも今どきおかしいぜ」

「どうして？」

「教えてやろう。技術革新つてのは凄まじいんだ。ハイテク義手を使ってひとりで食事ができるようになった人間がいる。両脚の動かない障害者にハイテク義足を装着し、家の中やご近所さんぐらいなら散歩できるようになったケースも今では珍しくない」

「ほう」

「これらはすべて脳科学とロボット工学の融合した成果だ。つまり脳の発した指令をコンピュータ制御されたロボットアームが受け取って動くという寸法さ。ある程度、指令の予測もできるからタイムラグはほとんどない」

「思い出したよ。脊髄損傷で歩けなくなったハリウッドスターが銀幕に返り咲いた話が昨年話題になったな。犯人を追いかけるシーンも吹き替えなしでやってたし」

「それも成果のひとつだ。『健常者並み』というのが、この応用技術の合言葉になっている」

「ってことは、クソガキの車椅子は——」

「一昔前の古い技術さ。まあ、植物状態の人間が自分の意思で動けたというのは初のケースだったから、マスコミには大いにウケたがな」

「——すると、最新の技術を使えば、クソガキはもっと自由に動くことができるのか」

「可能だね」

「どうしてそうしなかつたんだ」

「母親の考えだろう。息子が自分のカゴから飛び立っていけないようにさ」

「！」

「調べてみたら、事故に遭う前の炎少年は、学校より警察のお世話になるほうが多い、札付きの不良だったらしい。母親もかなり虐待を受けていた。それが事故のせいで母親の世話に頼らざるを得なくなった。盲目的な溺愛マザーの夢が曲がりなりにも実現したんだぜ。誰が自由にさせようなんて思うもんか」

「——ヒドい話だな」

「自業自得さ」

「母親にとつてもな」

雛田は木陰に停めた車を振り返った。かすかにヒステリー声漏れ聴こえてくる。飽きもせずまだ続けているらしい。

「さて、陽もそろそろ落ちる」カバ松はあぐらを解くと、

その短い足で立ち上がった。「暗くなつてからではライトが目立つ。今のうちに行ける所まで行くべきだろう。迷彩服どももWIBAに集まって、他は手薄になつてから、俺たちとしても動きやすい」

雛田は頷き返した。

しかし、心の中で別のことを考えていた。

（親とはむずかしいものだな……。僕は父親として、清香にどんな感情を抱けばいいんだろう）

2

「隊長代理！ WIBA社長を連れてきました」

「よし、俺が直接訊問しよう」

真崎は椅子を蹴つて、会議室へと向かった。

廊下を歩きながら何げなく窓に目をやると、湖面の端が金色に染まるのが見えた。比良山系に沈む太陽が、最後の瞬間に見せる悪戯である。

しかし真崎の瞳はそんな幻想的な風景の上を素通りし、湖上に泰然と浮かぶ都市へと吸い寄せられた。

近くで見るWIBAは巨大だった。説明を受けても、真崎にはWIBAが「浮かんでいる」のだとは到底信じられなかった。

（無駄だ。あんなモノ、無駄以外の何ものでもない）

さらに彼はいら立ちを募らせる。

（あんなフザけた場所に集まれたと？ 自己顕示欲の権化、真佐吉ならではの舞台選びだ。とことん人をおちよくりやがる！）

思わず壁に拳を叩き付けた。付き従う部下がヒツと肩をすくめた。

彼らリアルキラーズが新たな本部としたのは、近江舞子の、水辺に面したホテルだった。

後ろから「隊長代理！」と呼ばわって若い部下が駆けしてきた。真崎は足を止める。

「空にメッセージを書いたパイロットを捕えました」

「で？」

「それが妙なんです。パイロットは依頼は受けたものの、最初は断ったそうです。外に出て怪我をするのが怖いと言って。ところがお前の秘密をバラすと脅され、やむなく飛行機を飛ばしたと、そう証言しています」

真崎は顔をしかめ、判ったと言って、再び絨毯の上を歩き出した。

（凡人どもが！）

真崎は歯をきしらせた。

会議室のドアを開けると、六十前後の男がパイプ椅子に座っていた。その両腕は身体ごと縛られている。

「隊長代理」

シユウが顔を近づけてきた。社長を連れてきたのはシユウだった。すでにある程度の訊問は彼がおこなっていたはずで、その報告をするのかと思いきや、彼が口にしたのは、

「北尾と村井がやられたそうですね」

「ああ」

「増援部隊もすべてやられたとか」

「五十嵐というリアルリアルの老人の仕業だ。数日前に追加募集で仲間入りしたばかりの不慣れな隊員までやられた」

「何てことだ」

シユウは天井を仰いだ。

「すぐに五十人ほどを送り込んだのだが――」

真崎は首を振った。無駄足だったのだ。

シユウはスツと息をひとつ吸うと、いつもの顔に戻っていた。

「隊長代理、W I B A社長の宝井たからいさんです。ようやくご協力ただけて、こうして来てもらえました」

「き、き、キミ」

宝井は白髪を振り乱しながら立ち上がろうとしたが、立てないままストンと椅子に腰を落とした。腕を縛ったベルトが椅子にくくりつけられているのだ。

「こ、これは重大な人権蹂躪だぞ！」

「俺たちはね、社長」真崎は強いてゆっくりと語りかけ

た。「超法規的集団として国が編成したりリアルキラーズだ。我々の目的はこの世界に紛れ込んだリアルを消し、この世の終わりを回避することにある。つまり我々の要求に従わなかったり、我々の行動を邪魔する者は、人類の敵なのだよ」

宝井は息を飲んだ。返す言葉がなかったのだ。

「シュウ、彼がこれまでに白状したことは？」

「はっ、我々の調べでは、この一週間のあいだにWIB Aに渡った人間が数百人規模で存在することが判っています。ところが社長はそれを認めようとしません。そんな連中は知らないの一点張りで」

真崎は頷き、宝井の前に立った。

「その連中は何者ですか」

「知らん、わしは本当に知らんのだ！」

「なぜ入れた。アンタ以外にセキュリティを解除する権限を持つ者はいないんだぞ」

「知らんといったら知らん！」

真崎は胸ポケットからボールペンを取り出すと拳の中に握り、もう片方の手を宝井の肩に置いた。

「ど、どうするつもりだ!?」

「何を見ても見ぬ振りするような眼は、必要ないんじゃないかな？」

そう言ってペン先を宝井の右眼に近づけた。

「ま、ままま待ってくれ、言う言う言う。わしはただ頼まれただけなんだ！」

「誰に」

「知らん、それだけはわしにも判らん。突然電話してきて、二十四時間だけセキユリティを切れと言われただけなんだ」

「なぜすんなりと言うことを聞いた」

「それは……」

宝井は言い淀んだ。

真崎は微笑んだ。

「言つてやろうか、社長さん。脅されたんだろ？」

驚いたのは宝井だけではない。シュウも目を瞠みはった。

真崎は暗い眼光を宝井に注ぎながら、

「そいつは、伊里江真佐吉と名乗らなかつたか？」

「聞いてない。名乗りはしなかつた」

「匿名サンは何と言つて貴様を脅したんだ!？」

宝井は目を逸らして激しく首を横に振った。それだけは言えないというのだ。

「おめおめと悪魔に魂を売り渡してでも守らねばならぬ弱い弱みがあるというのか!？」

宝井はがっくりとうなだれた。滝のような汗が、床に滴り落ちていた。

真崎は部屋を出た。シュウが後を追う。

「宝井を拷問して口を割らせませす」

「無用だ。奴の秘密などには興味はない。どうせWIB A建設に関する談合か何かだろう。どいつもこいつも簡単に脅しに屈しやがって！」

真崎は怒りのあまり、床を踏み抜きそうな足取りで歩いてしたが、ふと気づいてシュウに顔を向けた。

「おい、お前にも握られて困るような弱みはあるか？」

「は？ ……特には」

「神や仏に誓って、生まれてから今日まで一度も人に言えないようなことをしたことはないか？」

シュウはかつてそんな質問をされたことがない。

「いや、それはー、うー」

ひどく動揺している。真崎の目にも、日頃のシュウらしくない素振りに映った。

「まあ、言う必要はない」

「申し訳ありません」

シュウはまるで先生に叱られた生徒のようだった。

「ただこれは俺からの命令として全員に徹底させる。隊員同士以外の電話やメールは、読まずに破棄せよとな」脅し文句に目や耳を奪われるな、というのである。

「りよ、了解しました」

シュウは切迫した表情で応えた。

それを見た者がいたなら、小クジラかシャチが浮上してきたものと勘違いしたかもしれない。残念ながらも琵琶湖には存在しないが。

それは大きなアブクだった。水面を盛り上げるように浮上したアブクは、風船のようにパンとはじけると、中から四人の人間を吐き出した。

人間のひとりが、係留されているヨットの船縁をつかみ、懸垂の要領で身体を船体の中に落とし込んだ。ヨットはわずかに軋きしんで左右に揺れた。

「シッ。音を立てないように」

萌黄が注意しながら、ハジメと協力して二番手の齋藤の尻を押し上げる。足の下がふわふわとしているため、なかなか思うようにいかない。

ハジメ自身は機敏な動作でひらりとヨットの上に飛び乗った。そして萌黄を振り返り、つかまれと言うように無言で手を差し伸べた。

萌黄の足が水面を離れると同時に、アブクは消滅した。解放された空気のかたまりは、湖上をそよぐ風に流れていった。

「疲れたやろ、萌黄さん」

齋藤がいたわった。

「はい、少し。でも前回の海のような激しい潮の流れがない分、楽でしたから」

いやいやと齋藤は顔の前で手を振りながら、

「いやあ、わしにとつては、世界が逆転して以来の驚きやったよ。まさか海の中を散歩させてもらえるとはな。

これが昼間やったらもつと水中の様子を見ることができたのに、それだけが唯一の残念やわ」

ヨットにはビニールシートが掛けられている。萌黄はシート陰から顔を覗かせた。ヨットハーバーをたどつていくと、そこには萌黄がかつて見たこともない、不思議な形をしたビル群が立ち並んでいた。

フロートシティ、WIBA。

四人は遂に湖上都市へとたどり着いたのだ。

「うわー、これが噂の『イーバ』かあ」と清香。

「ウィーバですよ」萌黄がツツコミを入れた。「確かにきれいですよねえ」

萌黄は、整然と灯るオレンジ色のライトに、しばし我を忘れた。

海の中を行こうと提案したのはもちろん萌黄だ。途中でまで空中を飛翔していた四人は、二度ほどヘリコプターの音を聴き、背筋を凍らせた。また、ライトでしきりに海上を照らす船の姿も遠目に見た。

迷彩服たちはリアルな飛行能力を知っている。

これは危険と判断した萌黄は、三人を誘って水面近くに降りた。

萌黄は伊里江兄弟の隠れ家であった小島を離れる際、身体をアブクに包むことで無事脱出した。それを再現したいと齋藤たちに提案したのだ。

夜の湖は暗い。清香はおっかなびっくりという顔だったが、齋藤はむしろ未知の体験は大歓迎と喜んだ。

敵もまさか萌黄たちが水中をやってくるとは想像していなかっただろう、シャボンのような泡の中で四人はふわふわと浮かびながら、誰に邪魔されることもなく、無事にWIBAへ到着することができた。

しかしながら、水中行は萌黄に長時間の集中力を要求した。到着直前の萌黄は、酸欠寸然で頭の中は真っ白になりかけていた。

深呼吸をする。すがすがしいそよ風に萌黄は生き返った心持ちがした。

ヨットハーバーの尽きた辺りに電光掲示板がある。そこには、

『WELCOME TO WIBA』

の一文が流れていた。萌黄は見るともなく眺める。

(まさか、真佐吉さんがわたしらの到着に気づいて、歓迎の合図を送ってるのか?)

笑いかけた萌黄の顔が突然凍り付いた。

「萌黄さん、あれ、おかしくない？」

清香も気づいたらしい。

電光掲示板の文字は、いわゆる「裏文字」ではなかった。リアルたちにとって「正置」な文字で表示されていたのだ。

「奴さん、やっぱりわしらの到着に目ざとく気づきよったかいのお」

齋藤が顎をさすりながら言う。ハジメは最前からW I B Aの美しい外観に心を奪われた様子もなく、周囲を警戒の眼で見つめている。

「考え過ぎでしょう」萌黄は自分に言い聞かせるように言った。「いずれ、リアルがここに集まってくると信じているんです。あの人なら、これくらいのことにはするでしょう。あまり真剣に受け止めないほうがいいですね」
「でも、真佐吉さんはすでにここにいるってことよね」
清香が不安げに身体を萌黄に寄せてきた。

「たぶん」

その時、一隻の哨戒艇が、サーチライトを振り回しながら接近してきた。四人は急いでビニールシートに下に隠れた。

哨戒艇は波を蹴立てて、ヨットの真後ろを通過して行った。

波が落ち着いてから、四人は顔を出した。

清香がW I B Aを見つめながら、首を傾げる。

「住んでる人はいないのかな」

「あそこを見て」

萌黄が指さした。

ヨットハーバーの根元は、さほど高くない堤防になっているが、その上をマシンガンを抱えた迷彩服が歩いていく姿があった。

「しつこい奴らやのお。これじゃおいそれと上陸でけんやないか」

齋藤が嘆くような声を上げた。すると、横でうずくまっていたハジメがやおら立ち上がった。

「俺が見てくる」

「ダメッ！」

萌黄は彼の腕をつかまえて座らせた。まるでハジメの行動を予測していたようなタイミングの良さだった。

「ここまで来て、無茶はせんといて」叱るように言ってから言葉をやめて「もうちょっと様子を見てからにしよう、な？」

ハジメはチツと舌を鳴らしたが、何も言わずに膝を抱えた。

ヨットは緩やかにローリングしている。四人は最終決戦場を前にした緊張感と興奮に、最初のうちこそ周囲へ

の警戒を怠っていないが、そのうち瞼が重くなり、ひとりまたひとりと、深い眠りに落ちていった。

4

「池で採ったミジンコ——あれを初めて顕微鏡で観察した日のことを思い出すな」

久保田があまりに真剣な表情で言うので、むんはつい吹き出してしまった。

彼女の前に置かれているノートパソコン。WIBA記念館で、五十嵐が斬り捨てた迷彩服の所持していたものだ。その画面には今、地図が映っている。

近江舞子の湖岸までわずか数キロという所にある、とある民家にむんたちは潜んでいた。時間は午後九時を少し回ったところ。

今夕、WIBA記念館を脱したむんと五十嵐は、無事に久保田の車に合流した。

そのまま日が暮れるのを待ち、大胆にも車を近江舞子に乗り入れ、たまたま発見した無人の民家に転がり込んだのだ。

画面は、自分たちがいる近江舞子の近辺を拡大表示し

ていた。久保田がミジンコと表現したのは、地図の上を動き回る「十点」のことだ。

「迷彩服たちの配備が一目瞭然でしょ？」

十点はリアルキラーズひとりひとりの動きを表していた。実際に遠くから観察し、正確に表示されていることは確認済みである。おかげで警備の手薄なルートを選んでWIBAに近づくことができたのだ。

こんな近くに隠れているとは、迷彩服たちも思うまい。「名前まで表示されるんだな。真崎の野郎も映ってるかい？」

むんは画面を指さした。

「ここ。湖岸に面したホテルの中にいてる」

なるほど、赤い十印なのに対して、それは紫色で、十印の下には御丁寧にも『真崎』と表示が出ていた。

「そのパソコンを使って、奴らに気づかれたりしないかな？」

「大丈夫。伊里江さんが位置情報を送信するユニットを無効にしてくれはったから」

ふと、むんは後頭部に突き刺さる矢のような視線を感じた。ほとんど殺気に近い。

チラと横目で見ると、和久井助手が斜め後ろのソファからこちらを睨んでいた。久保田が異性（この中ではむんだけ）と話すとき必ずこの視線が襲ってくる。むんは謂いわ

れの無い視線攻撃にほとほと弱っていた。

「和久井さん」

むんは身体を向けると、あえて自分から話しかけてみた。口許に少し笑みを浮かべながら。

「な、何でしょう」

和久井はあわてて視線をそらした。話す時に人と目を合わせないのがこの女性の癖である。

「大学のほうのお仕事はよろしいんですか？」

「ええ。有休を取りましたので」

あまりに見え透いた嘘に、むんは悪戯心をくすぐられた。

「それほど暇そうには見えませんでしたけどね。野宮さんが人手が足りなくて困ってるんじゃないですか」

むんが畳み掛けると、和久井は唇を噛んで、さらに何か言い返そうとしたが、

「まあまあ、休みは取れるうちに取ったほうがいいじゃないか」と久保田が割って入った。「和久井さんがいてくれて助かることもあるんだから」

久保田は夕食のことを言っていた。

意外なことに和久井は料理上手だった。

五人がこの無人の一軒家に潜り込んだ時、彼女は真っ直ぐキッチンに入り、冷蔵庫の残り物などで器用に全員の食事を作ってくれたのだ。しかも美味だった。

空腹の限界に達していた五人は、礼もそこそこに料理を腹の中にかき込んだ。

先にWIBA記念館を教えてくれたのも彼女ではあった。おかげで立体地図を入手することができたのだが、仲間の信太を失うという大きな代償を払った。もちろん和久井のせいではなかったが、あの光景は今も瞼の裏になまなましく焼き付いている――。

むんは記憶を振り払うように立ち上がると、部屋の隅で横になっている伊里江の枕元に近づいた。

「加減はどう？」

「……一進一退ですね。でもお気遣いなく。いつでも動けますから」

壁際には、五十嵐が両腕を組んで椅子に深く腰かけたまま寝入っていた。

（よほど疲れはったんやな）

むんもさつきから摺り足で歩いていた。足を上げるのが億劫なほど、疲労が蓄積している証拠だ。

（逃亡生活を始めて、もう何日になるんかな。萌黄の家でアホな話をしてたんが、一年以上前のような気がする。

——今頃どこでどうしてるんやろ。萌黄は）

ふと欠伸が催し、むんは大きな口を開いた。

その時、玄関のチャイムがポーンと鳴った。

むんの眠気は一瞬にして吹き飛んだ。

(まさか見つかった!?)

久保田が素早く立ち上がった。廊下を足音がしないよう、滑るように玄関に向かつていく。むんも後を追った。ちらりと見ると五十嵐は熟睡している。眼を覚まさなかつたようだ。

五人が潜んでいるのは、この家の最も奥まった所にある一室で、明かりは極力小さくしていた。

(見つかるわけないと夕力をくくつてたのに)

ふたりは廊下の角から玄関を覗き見た。すると今度はドンドンと扉を叩く音がし、さらに聞き覚えのある声が自ら名乗った。

『すいませーん、柊です!』

ふたりは驚きのあまり、顔を見合わせた。どうしてここに柊拓巳が――。

『助けてください! むんさん、いるんでしよう?』

柊の声は悲痛な色を帯びていた。

「あの野郎、のこのこと何しに来やがった」

久保田は怒りを露にして扉を睨みつけた。柊が萌黄たちにしたことは、萌黄がむんに送ったメールによって、久保田も知っていた。

『急がないと、もうすぐ敵がやってきますよー!』

(敵やて?)

むんは腹を決めて前に出た。

「いいのかい？」

問いかける久保田にウンと頷くと、玄関扉の鍵を外しにかかった。柎も解錠の音に気づき、声を出すのを止めた。

扉が開いた。柎の長身が旋風のように入ってくると、力尽きたかのようにその場に倒れ込んだ。身にまとった袈裟は襤褸布ぼろぬののようにあちこちが千切れていた。

「柎さん、敵が来るってどういうこと!？」

むんはいとまを与えず、詰め寄った。

「敵は」柎はハアハアと息を荒げながらも、ごくりと唾を飲み込み、「私にも判らない」

「判らんだとオ!？」

久保田がむんの前に出た。

「そうなんです。私はついさっきまで正体不明の敵の手に落ちていました。それをなんとか逃げ出し、ここまで知らせにきたのです。敵はあなたがたがここに隠れ潜んでいることをつかんでいます！」

柎の言葉に、むんは全身の毛を逆立てた。まさか発見されるとは思ってもいなかった。

しかし現に柎はここを知っていた。

「五十嵐さんたちに知らせやんと！」

むんは膝を立て、久保田が何か言う前に、奥へと駆け出した。

それが油断だった。

むんも久保田も、柊がリアルの力を発揮したところを見たことがなかった。萌黄から話を聞かされても、温和な僧侶という先入観を拭いきれていなかったのだ。

ツツと首筋に痛みを感じたときは、手遅れだった。

振り向いたむんが意識を失う前に見たのは、注射器を握りしめた柊の「下卑^{げび}た」笑みだった。

5

萌黄の薄く開いた目に、夜明け前の赤い光がおぼろに差し込んだ。

ビニールシートの下で、齋藤も清香もハジメも死んだように眠っている。

空には、二、三、千切ったような雲が浮いているが、おおむね晴天だ。

ヴァーチャル世界に迷い込んで、十一日目。

タイムリミットまで今日を入れて、あと四日。

萌黄は、ふいに焦燥感に囚われそうになり、あわてて打ち消した。

（あわてるな。長い道のりやったけど、やっとここまで来たんじゃないか。真佐吉さんはきつとここにいる）

頭をグツと反らせば、WIBAのビル群がまるで真佐

吉を守る兵隊のように、そこにあつた。ビルは最高でも二十階ほどの高さだから、高層ビルとは言えない。それでも水辺にずらりと立ち並んだ姿は小マンハッタンという偉容で、なかなかの圧巻だ。

四人が隠れているヨットは、湖面に伸びるヨットハーバーのほぼ先端に係留されている。今その付け根の辺り、WIBAの外周に数人の迷彩服が現れ、何やら話し込んでいる様子が気になるといえば気になる。

隣りで清香が「うーん」と声を上げた。「萌黄さん、起きてたの？」

清香は長い髪をかきあげながら、重そうな瞼を持ち上げた。

「おはようございます。……そや、清香さん、携帯貸して」

清香はポケットから携帯を取り出し、「はい」と萌黄に手渡した。

「ギドラ、いてる？」

呼びかけると、二つ首獣はフザけた格好で現れた。

真っ赤な花柄のパジャマにナイトキャップという出で立ちである。腕がないので枕を首のひとつがくわえている。

《何だい、こんなに朝早く》

「悪いんやけど、いまアンタの冗談に付き合う気にはなられへんねん。お願いやからマジメに聞いてね」

《いつもマジメさ》

パジャマと枕がパツと消えた。ナイトキャップだけが唯一抵抗するように、三つの頭の上に残っている。

「またメール、頼まれてくれる？」

《むんさんにだね。何て？》

「今どこにいるのか教えてほしいって。わたしらはWIB Aの湖岸とは反対側のほうにいることも伝えて」

《オツケー。それじゃ行つてくるね》

ギドラは金色にきらめく身体をひるがえすと、今度は三つ揃のビジネススーツに鱗の身体を包んでいた。ギドラはそのまま振り向きもせず、鞆をくわえると、ドアを開けてさっさと出ていった。すべて画面の中である。

ギドラを介したメールは、むんと別行動になったおとついの夜以降、何度かやりとりをしている。彼は毎度、茶化すような寸劇やらコスプレに興じるのが玉に瑕である。

普通にメールを送信するのは危険だとギドラが言うので、ずっと彼にまかせているものの、「ひよつとしてギドラは真佐吉の放ったスパイでは」という疑惑が湧いてから、萌黄の心中には複雑な思いが渦巻いていた。

発端は大学での脅迫電話による影武者騒動。携帯があれば誰のそばへでも自由に飛んで行けるギドラにとつて、人を左右できる脅迫ネタをつかむことは、造作のないこ

とだろう。まさか携帯電話の中で耳をそばだてている者がいるなどと誰も想像しないし、だいたい人間を強請るP A Iの存在など誰も信用しまい。

その後、疑惑はむくむくと膨らんでいった。

メールは本当にむんに届いてるのか？ 互いのやりとりが真佐吉側に筒抜けになっているのではないか？

かといって、その疑いを口にすればギドラは消えるかもしれない。根拠もないままギドラを詰問しても、この知的な怪獣は巧妙に言い訳するだろう。

その意味では、終に携帯電話を破壊されたのは、ラツキーと言えなくもない。いざとなればギドラと距離を置くことも可能だ。

萌黄はまたW I B Aを見上げた。

今日を入れて四日のうちに事を解決しないと、世界は本当の意味で終焉を迎えることになる。

W I B Aが最後の勝負の舞台。そうならねば。

たとえ真佐吉の罠が待っていないようとも、相手を飲み込むつもりで向かって行かなくてはならない。

萌黄は身体が震えていることに気づいた。

怖い。それもある。

しかしそれ以上に、真佐吉との勝負に対する期待感のよくなものが胸中にあるのは否めない。

(無類の人見知りで引きこもりのわたしが、誰かと戦う

ことに武者震いするなんて……。これもリアルパワーのせいかな)

そんなことをあれこれ考えていると、携帯の着信音が鳴った。ギドラのご帰宅だ。

《大変だよ。むんさんがいない》

ギドラの第一声に萌黄は絶句した。

「——いないって、どういうことよ」

すでに目覚めていた齋藤もハジメも、清香といっしょに携帯画面を覗き込む。

《判らないんだ》ギドラの口振りには、萌黄にもどこか取り乱しているように見えた。《呼びかけても反応がない。おかしいなと思って、三次元ホログラフィの限界まで背伸びして、辺りを眺めてみたんだけど、どこかの民家の床の上に落ちてるみたいなんだ》

携帯電話が、誰もいない家に放置されている？ 四人のあいだに緊張が走った。特に萌黄の驚きは尋常ではなかった。

「どこなんよ！ ちゃんと観察して教えなさい！」

《うーん、そう言われてもなあ》

「あちらの画えを見ることはでけへんのかいな？」

齋藤が口をはさんだ。

「そうよ、映像をこっちに送って」

萌黄は力を得て、ギドラに顔を寄せた。

《キビしいな。君たちの居場所が敵に判ってしまおうよ》
萌黄は一瞬躊躇したが、すぐに叫んだ。

「かまへん！」

他の三人も異を唱えない。

《了解。いちおう複数の中継地点を使つて、カモフラージュしてみるよ》

ドンッ！

突然、鼓膜を激しく震わせる炸裂音が鳴り響いた。

反射的に四人はヨットの底に身体を伏せた。

周囲の船に止まっていた鳥たちが、鳴き声を上げながら飛び立って行く。

「迷彩服か？」

齋藤が叫んだ。

おそらくそうだろう。音は迷彩服たち一団のいた方向からした。

ハジメが機敏にビニールシートから出ると、音を確認しに伸び上がったが、すぐに背を屈めて戻った。

「停泊している船を沈めてる」

「どういうことや？」

「たぶん、わたしらみたいなのが、こっそり隠れへんよ
うにと違う？」

萌黄は推測した。

するとその推測が正解だと言わんばかりに、続いて二

つ目の爆発音がした。心なしかさつきよりも近いようだ。「これはいつまでも隠れてられんな」

齋藤は動揺しつつ、いつもの薄笑いを浮かべている。

《ただいま》

ギドラが唐突に帰ってきた。萌黄は携帯に飛びついた。

「映像はどれ？ もう、早く！」

画面はすぐ中継映像に切り替わった。

はたしてギドラが言うように、確かにどこかの床の上だった。カメラは右へ右へとパンしていき、やがてそこがありふれた民家の玄関であることが判明した。

「どこの家やる。手がかりになりそうなものは？」

映像が二周目にさしかかった時、うめき声と人の腕が画面を横切った。

「誰ー？」

『ううう、くそお』

「その声は久保田さんやね？ 久保田さん！」

『も、萌黄さんか？』

腕しか見えないのも無理はない。久保田の身体は玄関の三和土の上に伸びていたのだ。やがて彼の顔が映像の中に現れた。

『不覚だった。柎にやられたよ』

「柎さんに——！」

萌黄は戦慄を覚えた。夜の堅田で見た柎の俗悪な笑い

顔が脳裏によみがえる。

「むんは!？」

久保田はみぞおちの辺りをさすりながら、反対の手で後頭部をさすっている。おそらくリアルパワーで殴られ、倒れたはずみに頭を打って気絶していたのだろう。

『むんさんは——さらわれた』

「!」

萌黄の身体中の血が逆流した。

「久保田さん、そこはどこ？」

『番地は判らないが……近江舞子駅のすぐ近くにある、小学校の裏だ』

萌黄は立ち上がると、ビニールシートの外に出た。

「萌黄さん、待って！　いま出ていくと危険よ」

萌黄は清香を振り返った。その目は清香が見たこともないような静かな怒りに包まれていた。

「わたし、行く！」

「でも……」

「むんは、わたしのかけがえのない親友。どんなことをしても守らんとあかんの」

齋藤が「うむ」と大きく頷いた。

「その意気やよし。後は心配せずに行きなさい」

萌黄はぺこりと頭を下げると、ヨットから栈橋の上に、ダツと躍り上がった。

そして深呼吸をひとつすると、

(大気よ、わたしを包め！)

心の中でまじまないのように唱え、 棧橋の羽目板を力
いっぱい蹴った。

萌黄の身体は、ロケットのように空高く飛んだ。

みるみる萌黄は黒い点になった。

見送る三人の耳に「いま奥で音がしなかったか？」と
迷彩服の声が聞こえた。こちらへ駆けてくるようだ。

「わたしたちも逃げなきゃ」

清香は携帯をポケットに突っ込んだ。

「そやな。ん？」

齋藤は、萌黄の飛んで行った空をじっと見ているハジ
メに気がついた。齋藤はハジメの背中を叩いた。

「あのコを助けたれ」

「——でも、ジイさんはどうする」

「わしなら心配すな。この美人さんを守る老騎士の登場
や」

そう言ってウインクした。

ハジメは「死ぬなよ」とひと言残すと、棧橋に這い出
し、萌黄の後を追って空に飛び上がった。

「何か飛んでったぞ！」

「鳥じゃないのか」

「違う。もっと大きいものだ」

そんなリアルキラーズたちの叫びをよそに、齋藤は清香の前に手の平を差し出した。

「お嬢さん。どうかお手を」

迷彩服らが四人の潜んでいたヨットまで駆けてくると、入れ違いに大きな水音がして、周囲の船をさざ波が揺らしていた。

「おい、見たか、いまの」

ひとりの迷彩服が仲間に訊ねる。

「小クジラじゃないのか」

「俺にはシャチに見えた」

「バカ言うな。琵琶湖だぞ」

ヨットはもちろん、もぬけの殻だった。

6

一度の跳躍で、萌黄はWIBAを見おろす高さにまで舞い上がった。ところが予想だにできなかったものがそこで待ち受けていた。

「うわっとと」

萌黄はオオヒシクイの群れの中に飛び込んだのだ。萌黄のまわりで羽ばたきと鳴き声が激しく交錯した。

萌黄はバランスを崩し、百メートルほど落下したが、苦闘の末、なんとかバランスを取り戻すのに成功した。

鳥の群れをやり過ぎ、ホッと一息ついた時、背中がじんわりと温かくなった。遙か前方に見える比良山系の峰々に赤味が射していた。夜明けの曙光が新しい一日の始まりを高らかに告げていた。

萌黄に景色に見入っている余裕はない。先を急ぐべく自分を包んだ空気に、徐々に加速をつける。

今度は遠方からヘリコプターのローター音が聞こえてきた。ヘリは南から近づいてくる。距離はまだずいぶんあり、あさっての方角に向かっていたので萌黄が見つかったわけではなさそうだ。

いちおうの安全を考えて、萌黄はさらに高度を上げた。すでに空を飛ぶ技は完璧なまでに身につけていた。

あらためて湖面を見おろす。

この高さまで来ると、さざ波が小さな皺程度にしか見えない。そしてWIBAはあくまで巨大な偉容を誇らしげに広げている。

湖岸線を越え、近江舞子の上空に達した。

朝陽を浴びた近江舞子の街並は、くつきりと浮き彫りのように萌黄の足許に広がっている。

彼女にはこの辺りの土地勘はなかったが、JR線をなぞって駅のホームを発見すると、ほんの少し離れた場所に土色のグラウンドを発見した。小学校だ。

萌黄は急降下した。

すると学校の裏手の、狭い道路に面した家から久保田が出てくるのが見えた。

「久保田さん！」

勢いよく着地した萌黄に、久保田は意表を突かれたらしい。えつという顔をして、空を見、また萌黄を見た。

「あ、もう来たの」

「柊さんはどっちに逃げましたか？」

「それが……スマン、気を失っていて」

久保田は汗にまみれた顔を素直に下げて詫びた。

「誘拐されたのは、むんだけですか」

「いや、五十嵐さんも伊里江君もいなかった。和久井君は俺同様、気絶させられていた」

柊はリアルを選つて連れ去つたのだ。

（堅田では、わたしと齋藤さん、ハジメさんの三人を手土産に、真佐吉と交渉するようなことを言つてた。でも、わたしらはうまく逃げおおせて、柊さんにしてみれば恥をかくような結果になった。もしかしたら名誉挽回のつもりで新たな三人をさらつたのかも）

しかし、むんはリアルではない。なぜ彼女までも。

（わたしをおびき出す餌にするつもりか——）

萌黄はまた怒りが込み上げてくるのを感じた。

「おい」

ぶつきらぼうな声が天から降ってきた。

ハジメが萌黄の横に降り立った。萌黄よりも安定した着地だったのは、飛び慣れているからだろう。

「ハジメさん、来てくれたん」

萌黄がうれしそうに言うのを無視してハジメは、

「敵がもうそこまで来てる」

と言つて、ふたりを敷地内に押しやった。

「敵——迷彩服が？」

ハジメは頷く。萌黄は久保田を振り返り、

「急いで逃げましょう」

「そうだな、和久井君を呼んでくる」

久保田はすぐに彼女を連れて戻ってきた。和久井はすでに白衣を脱いで着替えていた（目立ち過ぎるため）。他に荷物はむんと伊里江のリュックやパソコンぐらいである。

「来たぞ！」

ハジメが指差す方向から車の音が近づいてきた。久保田はここまで乗り付けた車を出そうとしたが、とても間に合わない。

「うるさい蠅どもめ」ハジメは肩頬を上げて吐き捨てる
と、「ここは俺が引き受ける。行け」

「でも」

「アンタは親友を取り返せ」

ハジメは、十代の少年とは思えない大人びた口調で言

うと、あとは振り返りもせず、路上に出ていった。

萌黄はその背中に「ありがとう」と言い、久保田と和久井の手をつかんだ。

「わたしの言うとおりにして。一、二の三で息を止めて力を抜くの。昇りのエレベータに乗るんやと思えばいいから」

ふたりは心細そうな顔で頷いた。

「行きますよ。せえのっ！」

三人の足がふわりと浮いた。すぐに加速が付き、まるで天に向かって落下して行くような錯覚を久保田は感じた。和久井はヒツと一声漏らした後は、ずっと瞼を閉じていた。

ハジメに殺到したりリアルキラーズは総勢二十人あまり。手に手に銃やマシンガンを持っているのはいつものとおりである。

迷彩服たちはハジメが民家の前に立っていることに気づくと、前触れもなく撃ってきた。弾丸の雨が降り注ぐ。「へっ、能もない繰り返しか」

銃弾はハジメに当たることなく、路面に転がり落ちる。ハジメはポケットに手を突っ込んだ格好で、迷彩服の前に一歩、二歩と歩み出た。迷彩服たちはハジメに圧される形で、じりじりと後退を始めた。

「ホラホラお前ら、早くウチ帰って寝ろよ。帰らないと全員砂にしてやるぞ」

不敵なセリフを投げつけながら、なおもハジメは四歩、五歩と前に出る。

ちようど家と家のあいだまで来た時だった。

背後を突くように、狭い路地からハジメに向けて、一本の光線が浴びせかけられた。

ハジメは素早い動きでよけようとした。ところがなぜか身体が思うように動かなかった。

光線源をたどると、奇妙な形をした銃から出た光線の色は「黒」。光のない光線だった。

奇妙な銃を構えた迷彩服の背後には、あの野宮助教授の姿があった。

「新しい——秘密兵器か」

今や足はおろか、腕も首も動かせなくなった。

野宮は「やめ」と告げると、ゆっくりとハジメに近づいた。

しばらく、相手の顔を覗いていた野宮は人差し指を突き出し、ハジメの額を軽く押した。ハジメの身体は石膏に塗り固められたように、同じ姿勢のまま路上にひっくり返った。

「ど、どこまで行くんだ？」

久保田が震える口で訊ねる。

「おふたりにはひとまず、どこか安全な場所に隠れても
らいます！」

萌黄が口早に答えた。

高度五百メートルの空の上である。久保田は血の気の
失せた顔で硬く目を閉じていた。船の上は平気でも、空
の上はかなり苦手らしい。

逆に、和久井助手は、珍しげに小さく見える街並を眺
めている。見た目以上にタフかもしれない。

萌黄はふたりの手を必死でつかんだまま、真っ向から
吹きつける風と必死に闘っていた。ひとりでも大変なの
にふたりを連れての飛翔は、バランスが非常に取りにく
いということを萌黄は初めて知った。

「それで」久保田は唇を舐めながら言う。「萌黄さんは
その後、どうするんだ！」

「WIBAに乗込みます。柊さんは真佐吉さんとつな
がっているはず。それにリアルでもないむんを連れ去っ
たのは、わたしをおびき寄せるため。としたら、むんを
連れ込んだのはWIBAに間違いないでしょう！」

萌黄は大声で答えた。声を張らないと強風に負けて、
相手の耳に届かないのだ。

「そうか——それなら俺も行こう！」

「危険すぎます！ あそこには迷彩服も待ち構えているし、真佐吉さんがどんな罠を仕掛けているか判らないんですよ！」

「いいさ、乗りかかった船だ！」

久保田は彼らしいたとえを口にして萌黄の手を強く握った。その手の平には薬指と小指がなく、中指も満足には動かない。

「ここまでいっしょに行動してきて、最後だけ外れるなんて、気になる映画のラストを観ないようなもんだ！」

「私も参ります！」

和久井もおかつぱ髪を風に乱しながら叫んだ。

「もー、どうなつても知らんよ！」

萌黄はかぶりを振ると、さらに高度を上げた。

上空から見おろしたW I B Aは、完全な正方形をしていた。久保田と和久井を連れた萌黄は、中央に立つビルの屋上に着地した。

久保田は腰が砕けたように、その場に尻を降ろしたが、萌黄はビルの縁に近寄って地上を見下ろした。

眼下にはちよつとした広さの正方形の広場がある。中心には琵琶湖をかたどった人工池があった。いまその近江舞子辺りで鈍い光がゆつくりと点滅している。W I B

Aの停泊地を示しているのだ。

広場は萌黄のいる建物によって、コの字型に囲まれている。屋上から観察した限りでは、建物は入れ物が完成した状態でストップしたらしく、将来は百貨店になるのかホテルになるのか、萌黄には見当がつかなかった。

コの字の開いたほうは広い下り階段になっていて、その先は左右に伸びた大通りにつながっている。

今その大通りを迷彩服を乗せた数台のジープが横切っていていくのが見えた。

「あの連中も入り込んでやがるのか」

久保田が背後で苦い声を上げた。その手がパソコンを持っている。

「それは？」

「ああ、俺たちのグループの戦利品さ」

久保田はWIBA記念館のことをかいつまんで話した。

「信太さんは亡くなったん!？」

久保田は、自分はその場に居合わせなかったんだがと言い、

「砂状化した自分の身体の砂をつかみ取って、敵に目潰しを喰らわせたらしい。根性のある男だったんだな」

萌黄は呆然とした目を広場に落とした。

すると突然、空気を震わすような鐘の音が広場に鳴り響いた。哀感をそそる音だった。鐘は七回鳴った。

「午前七時か」

パソコンの時計表示を眺めていた久保田は、ふと正気に戻ると、

「萌黄さん、これだよ」

と言つて、メニューから『W I B A地図』を選んだ。たちまち画面の上にW I B Aの立体CG地図が現れた。

「スゴいやん、久保田さん。その赤い点は？」

「迷彩服どもだ」

全体を俯瞰ふかんできるサイズに縮小すると、その上を動き回る赤の十点が無数にあることが判った。

萌黄はなるほどこれは確かに戦利品だと思った。これがあれば広いW I B Aの中で迷わずに済む。

「あつ、紫が陸から渡ってくるぞ」

「紫は誰なん？」

「真崎だよ」

萌黄はまばたきをとめて画面に食い入った。

「ハジメさんは？ 清香さんと五十嵐さんは？」

「残念だがそこまでは無理だ」

萌黄は地団駄を踏んで怒りを表明した。いっしょにいた仲間が今や散り散りバラバラだ。無理もない。

「わたし、真崎に会って訊いてくる！」

「それは無謀すぎる。衝動で動いちゃいけない。こちらも作戦を練ってかからないと敵の思う壺だぞ」

久保田が諫めると、萌黄は頭を掻きむしり、そのまま床の上にあぐらをかいて座り込んだ。それを見た久保田が抑えた口調で言い添える。

「まずは偵察が必要だ。我々にはふたつの敵がいる。真佐吉と迷彩服たち。彼らの裏をかくには——は——」
後が続かない。

萌黄と和久井は久保田の顔を覗き込んだ。久保田は苦笑混じりで頭に手をやるしかない。

「まあ作戦はこれから考えよう」

萌黄は立ち上がって、尻のほこりを払い落とした。

「わたし、偵察に行ってくる」

「ひとりでか？」

「うん」

「それなら」横から和久井が話しかけた。「これを持って行くといいですよ」

彼女が出したのは、むんの携帯電話だった。

「立体地図がこの中にコピーされています」

萌黄は、ありがとうと言って受け取った。

「気をつけて行くんだぞ。俺はこの地図を検討して、電力を一番使えそうな場所を探しておく。転送装置はきつとそこにあるだろうからな」

萌黄は右手でオツケーの印を示すと、広場に向かって跳躍した。

グレーの扉が両側にスライドし、迷彩服の一隊がなだれ込んできた。どの手も油断なく銃を構えている。

彼らの出たエレベータの出入口は、円形の部屋の真ん中にあつた。遮るものない室内には誰のいる気配もない。

「最上階の展望台は、カラです」

ひとりがレシーバーを取り上げて報告した。

《了解。予定どおり二名は見張りとして残り、他の者は戻ってこい》

真崎の声が短く応答した。

室内が無人と判り、ホツとした彼らの目は自然と窓に引き寄せられた。無理もない。ここは三百六十度、全方向を眺め渡せる展望台であり、そこからの眺望はまさに絶景だったからだ。南北に連なる山々を背にすれば、琵琶湖の美しい湖面をワイドに見晴らすことができる。

WIBAセントラルタワー。

時刻は夜明け。刻々と高度を増す陽光が、絵画に筆を入れるアーティストのように風景に彩りを添えていく。

そのあまりの雄大さ、優雅さに、殺伐とした迷彩服たちも、一瞬任務を忘れて見入っていた。

「これが全部、十日前にできたばかりの世界なんてな」
「俺も時々、夢を見てるんじゃないかと思う時があるんだ」

「おい」リーダー格の男が背後から冷静な声を浴びせた。
「お前たちふたりはここに残れ。悠長な観光気分浸つてるんじゃないぞ」

「了解」

ふたりはあわてて敬礼を返した。

タワー最頂部、展望台の天蓋部分はドーム状になっており、何の変哲もないアンテナが立っているだけだ。

今そのアンテナに寄りかかるようにして、萌黄が両膝を抱えて座っていた。朝の風がむき出しの二の腕を撫で過ぎていく。

近江舞子の方向を見おろすと、ビルとビルのあいだに、ちようどWIBAと陸地を結ぶ栈橋が小さく見えた。栈橋の上では迷彩服たちが等間隔に立ち並んで辺りを警戒しており、兵員輸送車が続々と渡ってくる。

萌黄はさつきからその隊列を注視していた。注視しているものの、頭の中では何も考えていなかった。

(くたびれた)

ハアとため息をつき、顎を膝の上に乗せる。途端にお腹がグウと鳴った。思い返せば、昨日の昼から何も食べ

ていない。それでも昨夜はヨツトの中で十分な睡眠がとれたせいで、肉体的な疲れはほとんど残っていないかった。ところが精神的疲労のほうは、今になって堰を切ったように萌黄の頭上や両肩に覆いかぶさってきた。

むんが誘拐された。その一事に尽きる。

思い出したくなくても、あの堅田の裏ぶれた喫茶店の奥の畳部屋、柵の葉によつて眠らされた齋藤やハジメの姿が脳裏によみがえってくる。

(むんの身にもしものがあつたら)

そう思うとたまらなくなる。冷静でいられなくなる。

「偵察してくる」と言つて飛び出したのは、じつとしていられそうになかったからだ。真佐吉や迷彩服たちに先手を取られてばかりの現状に、たまつた鬱憤うっぷんが爆発しそうになつたからだ。

その上、味方が次々と行方不明ときては――。

ビルの屋上から飛び立つてすぐ、萌黄は和久井から受け取つたむんの携帯電話を開いた。ギドラはそこにいた。ヨツトで分かれたままの清香と齋藤に連絡をつけたいと言つたところ、ギドラの答えは無情にも、

《ダメだ。清香さんの携帯は電源が入ってないか、電波の届かないところにいるよ》
というものだった。

ふたりはあの後、殺到してきた迷彩服たちによつて囚

われの身となったのか？ 自分だけ別行動をとったのは失敗だったのだろうか？

さらには自分や久保田を逃がす盾となったハジメはどうしたのか？ 大学の時のように持ち前の技で敵を撃退することができたのか？

彼らがもしも真佐吉や迷彩服の手に落ちたとしたら、自由に動けるリアルは自分だけだ。

萌黄は心細さにますます動けなくなつた。ギドラが先ほどからしきりに呼びかけてくるが、真佐吉につながっている可能性を思うと相手にする気がしない。ずっと「ああ」や「うん」などと、生返事ばかり繰り返している。

萌黄はもう一度、WIBAの街並を俯瞰ふかんした。

彼女の目に映る建物群はどれも現実味に乏しかった。

理由はすぐに判つた。建物はどの壁面もまるで判で押しつたようにグレーに統一されているからだ。多少の濃い薄いはある、「WIBAによるこそ」などと書かれた原色の垂幕などが掛けられたりしているものの、ほとんどの建物は味も素っ気もない色をしていた。その上、奇妙なことに、どの窓も一樣に小さかつた。

「未来都市なんて、かえってこんなもんかな」

それにしても見栄えが良くない。萌黄は心の中でWIBAに赤点を付けると、そろそろ戻ろうと立ち上がった。

まさにその時。

萌黄の厳しい採点に異議を申し立てるように、W I B Aは「決起」した。

W I B Aは目覚めたのだ。

数分前――。

栈橋の上、W I B Aに向かうジープの中で、シュウが真崎に報告していた。

「宝井社長がようやくセキュリティ解除のパスワードを白状しまして、我々もこうしてW I B A内部に部隊を送り込むことができました」

「やったのか？」

真崎が短く訊ねる。

「手の甲に錐きりを刺してやっただけです。ただ――」
シュウは笑うとも怒るともつかない表情をした。

「どうした？」

「これも真佐吉のしわざでしょうが、セキュリティ解除と同時に、ネットテレビが一齐に広告を流し始めたのです。内容は宝井の談合汚職に関する暴露記事で、彼が強請られていた内容はこれでしょう。隊長代理の読みどころでした。これは政界を巻き込む一大スキャンダルに広がるでしょう」

「平時ならな」真崎はぼつりと言っただけで話題を変え

た。「小学校裏手に潜んでいた連中は取り逃がしたらしいな」

「はい。残念ながら、捕獲できたのは小田切ハジメという青年だけです」

「野宮助教授の開発した秘密兵器か」

「人工ブラックホール技術を応用したもので、リアルな能力を一時的に奪い去るんだとか」

「あの太鼓腹がやつと役に立ったか」

「青年は特殊な檻に放り込まれました。これも助教授お手製です」

「だが逃がした魚は大きい」真崎は近づくWIBAの建物を見上げながら言った。「まあ、逃げた萌黄らも、いずれここに来るだろう。今度こそ決着を——」

真崎が前を見たまま絶句した。シュウも上司の視線を追って前方に視線を向けた。

「！」

「何だこれは!？」

9

真崎とシュウは言葉もなく立ち尽くした。彼らだけではない。他の隊員たちも、ある者は運転する車を止め、ある者は思わず構えた銃の照準から目を離した。

W I B Aは数多くの観衆を前に、まるで目覚めたばかりの赤子のような大きな産声を上げた。

実際はスピーカーから流れた合成音声だったのだろう。だがその声は、ゆっくり胎動するように動き始めたビル群を、生き物に見せるだけの効果は十二分にあった。

いや、そもそもビルは動いてさえない。動いているのは壁面に現れた色彩豊かな図形だった。

円、三角形、四角形、星形、その他大小さまざまな幾何学図形が壁面全体を覆い尽くしている。図形たちは赤、緑、紫、青、黄色などで彩られ、赤子の泣き声に重なるように流れ出した鼓動音に合わせて脈動を始めた。

「こ、これは壁をスクリーンに見立てて映像を映してるんだな!!」

シュウが叫ぶと、真崎は「違う」と即座に否定した。

「W I B Aのデータを検索しろ！ このビルの壁面は何でできてる？」

シュウはジープに搭載されたパソコンにしがみついた。答えはすぐ返ってきた。

「液晶です。壁面はすべて液晶パネルになっているんです！」

うわずった声で答えるシュウとは対照的に、真崎はフンと鼻で笑うと、唇の端をねじ曲げて、

「真佐吉の野郎、W I B Aは俺が乗っ取ったとデモンス

トレーションのつもりか。面白い！」

真崎のいる所からは、W I B Aの中央に走るメインストリートを見通すことができた。そのメインストリートの中央辺りに象徴的に屹立きつりつしているのはセントラルタワーである。映像はちょうどタワーを中心にして流れている。円や三角形が魚だとすると、W I B A全体が遊泳水族館のようだった。空の上から見おろせば、湖上都市は回転しているように見えることだろう。

やがて回転は緩やかに止まり、図形群はひとつ残らず消えた。そしてスピーカーからの音はドラムロールへと変わり、聴く者に何かの登場を予感させずにはいなかった。

真崎は両手を胸の前で組んで次の展開を待った。

やがて期待に応えるように、ひとりの男が壁面に姿を現した。

萌黄はタワーのアンテナを左手でつかんだまま、墓石のように並ぶビルの壁面を見おろしていた。

《これはこれは皆さん！》男は満面の笑みを浮かべながら大げさに両手を広げた。《ようこそいらっしやいました。私が当迷宮の主人、伊里江真佐吉でございます》

真佐吉の姿は、すべての壁面に同じ映像が投影されていた。萌黄にはようやく窓の少ない理由が判った。

《いよいよ役者が揃ったという感じですね。リアルの皆様さんにリアルキラーズのかたがた。……んん？》

真佐吉は、手の平を目の上にかざした。その姿が全てのビルのすべての壁面で動くため、萌黄は気分が悪くなりそうだった。

《おや、セントラルタワーのてっぺんで風に吹かれているお嬢さんは、あの光嶋萌黄さんではありませんか？》

萌黄は驚きのあまり足を滑らせ、あわててアンテナをつかみ直した。

《ハツハツハ、気をつけてくださいよ。ご対面するまで元気で頑張ってもらわないと、このゲームが盛り上がりませんからね》

ゲーム。この男はあくまでそう言い張るつもりらしい。萌黄は身体の中で怒りの炎が燃え上がるのを感じた。この男のせいで、どれだけの血が流れされたことか。どれだけの人々がいま苦しんでいることか。

抑えきれなくなった感情を萌黄は拳に込めて、アンテナの基部に力まかせに叩きつけた。アンテナはメキメキという音と共に傾き始めた。

「おや、タワーの上から」

真崎の後ろで別の声が出た。ジープのすぐ後ろにいたワゴン車を降りてきた野宮助教授の声だ。真崎は振り返

りもせず、胸の双眼鏡をセントラルパワーに向けた。

丸いレンズがアンテナらしきものを捉えた。落下速度からみて、かなり大きなものだ。やがて数秒ズレて地面に激突する音が真崎の耳に届いた。

「光嶋萌黄。すでにWIBA入りしていたか……」

真崎が双眼鏡を外すと、ジープの脇に野宮が歩いて近寄ってきた。

「隊長代理さん。リアル退治は私にまかせてはもらえんかな」

「あんたか。どうやるんだ？」

真崎が無言だったので、シュウが聞き返した。

「今日の夕方、大学から新兵器の第二弾が到着するのでな。ひよつとすると本日中に、降参した真佐吉の顔を、じかに拝めるかもしれませんぞ」

「ほう、それは頼もしい」

シュウが褒めそやすように言うと、真崎も珍しく身体を乗り出して、

「まあ、ひとり捕まえた功績は認めてやるよ。アンタは大した科学者だ。今度はどんな仕組みでやるんだ？」

すると野宮は得意げな含み笑いをしながら大きな腹を突き出し、

「なあに、人工ブラックホールの放つプラズマ放射の指向性をゼロにしたんですよ。これをWIBAのど真ん中

に設置、作動させれば、ゴキブリやダニのごとくリアルはイチコロだ。数キロ以内にいれば、彼らは麻痺したように動けなくなるという仕組みだ」

「部屋の中に隠れていてもか？」

真崎が重ねて訊ねる。すると野宮は予期していようように人差し指を左右に動かしてみせ、

「どこにいようが関係ナシ！ たとえ鉛の部屋に閉じこもっていようとな」

ワハハハハと高笑いを残して、助教授はワゴンに戻っていった。

10

アンテナをなぎ倒した萌黄の拳には、巨大な壁面で嘲笑し続ける真佐吉に対する憤りが込められていた。

しかしアンテナが折れてしまうと萌黄は予想していたわけではない。基部からポキリと折れ、展望台の屋根を重々しくバウンドしたアンテナは、そのまま萌黄の視界からスッと消えていった。

萌黄は四つん這いになって、屋根の縁まであたふたと近づいた。おそろおそろ覗き込むと、アンテナは誰もいない道路の上にちょうど激突するところだった。ゴワーンと大きな破壊音が辺りに響いた。

(リアル。パワーが強くなってる)

萌黄は腹這いになったまま自分の拳を顔に近づけた。

じんじんと鈍い痛みが残っている。

(注意せんと誰かを傷つけてしまう)

殴った瞬間は、まな板を殴りつけたくらい感触しかなかったのに。この先、リアルはどうなってしまおうのだろう。萌黄にとってはタワーの高さ以上にそのことが恐怖だった。

(ひとりじゃ無理。ひとりじゃ耐えられない)

萌黄は両腕の中に突っ伏した。

今こそ誰かにそばにいてほしいと思った。

しかし、むんは誘拐されてしまい、仲間たちは散り散りになった。

(わたしはこれからどうすればいいの？ 誰か教えてよお！)

そんな心の叫びに返ってきたのはローター音だった。

ハッと顔を上げる。その目に迷彩服の駆る一人乗りオートジャイロが迫ってくるのが見えた。数は三つ。どれも鼻面に機関銃らしき武装を施している。萌黄は頭を現実に戻すと、もはや退却するしかないと判断した。

(ひとまず久保田さんと合流しよう)

展望台を蹴った時、タワーがわずかに揺れた。

萌黄がビルからビルへと飛び跳ねるあいだも、壁面の真佐吉は彼女を追い続けた。

《萌黄さん、そう派手に動いていると敵についてこいと
言うようなものだよ。ハツハツハ》

確かにその通りである。忍者のくの一でもあるまいし、フィクションの世界のように、急にヒロイックな活躍を自分自身に要求しても無理というものだ。

萌黄はひとまずマンションらしき建物のバルコニーに身を隠した。少し遅れてオートジャイロが通り過ぎていく。周囲を見回すと、隣りのビルとの間が狭い路地になっている。萌黄はひらりとバルコニーを飛び越え、地上へと飛び降りていった。

（高い所にとまってる鳩を見て、怖くないんかなと思つたこともあるけど、飛べるっていうのは高さに対する恐怖心がなくなることでもあるんやね）

路地に着地した萌黄は、ジャイロの飛び去った方角とは別のほうへ駆け出した。路地といっても身を隠すものは皆無だ。ボーツとしていればすぐに見つかってしまうだろう。

「そや、地図地図」

萌黄はポケットから携帯電話を出した。和久井助手から受け取ったむんの携帯である。メニューから地図を選ぶと、すぐにWIBAの立体地図が立ち上がった。

地図は萌黄の目の前でぐるっと一周した後、現在地を光の点で指し示した。点はふたつのビルの隙間で生き物のように明滅している。どこかに安全な逃げ道はないかと目を走らせると、すぐそばの地面に開いた四角い穴に気がついた。地下通路だ。

携帯をつかんだまま、ビルの角まで走り、通りの左右を確認する。さいわい迷彩服の姿はない。萌黄は地図の通りに穿^{うが}たれた地下通路の入口まで一気に駆け寄り、階段を足早に降りた。とっさの判断で、併設されているエスカレーターには乗らなかった。乗客に反応して起動するタイプのエスカレーターだったので、動き出す機械音を気取られるのを恐れたからである。階段を下りる足音もできただけ鳴らないよう注意を払った。

《いいぞ、萌黄さん。その調子だ》

壁には萌黄を追うように、真佐吉の姿が滑っていく。萌黄は無視した。そして地図を見る。通路は久保田たちと共に降りた最初のビルまで続いているようだ。

転けたりしないよう逸る心を抑えて、一步一步確実に階段を降りていく。

地下フロアに人影はなかった。気配すら存在しない。にもかかわらず天井の蛍光灯は明々^{あかあか}と灯っており、おかげでそこがショッピング街を想定して作られたエリアであることは一目で判った。

もちろんさまざまな店が入るのであろう場所は、降りたシャッターで閉め切られている。彼女の目に映ったのは、ひたすら真っ直ぐな通路だけだ。

萌黄は駆けた。今こそリアルパワー全開だとばかりに、百メートルを九秒台の速度で走り抜けた。

走りながらも、常に背中では真佐吉の視線を感じていた。

「お——おかえり！」

久保田は全身で喜びを表して萌黄の帰還を喜んだ。

久保田と和久井助手は、ビルの最上階に降りる階段で萌黄の帰りを待ちわびていたので、普通に下から階段を昇ってきた萌黄を見て驚いた。

「——そうか、敵も重装備でWIBAに入り込んでいたか。それじゃおいそれと空を飛ぶわけにもいかんか」

久保田は言いながら、耳は注意深くドアの外に向けられていた。屋上からは風に混じって、遠くを旋回するオートジャイロの音が流れてくる。

「携帯メモリーに入ってた地図のおかげで、無事にここまで帰ってこれたんよ」

萌黄は携帯電話を手の平で撫でた。まるでむんを愛おしむように。

「あっ」

久保田が妙な声で叫び、自分の腹を手でさすった。

「どうしたの？」

「腹の虫が鳴った」

それを聞いて、萌黄の腹もぐうと鳴った。

「食事をする暇なんてなかったしね」

「さすがに空腹には勝てんなあ。どこかに開店してるレストランかコンビニはないのかい？」

萌黄は立体地図をふたりの前にかざすと、

「オープンの予定はあるけど、まだ早いみたい」

その指さす所には確かに有名ファミリーストランやコンビニの店名があった。そのどれも『開店期日未定』と注記されている。

久保田は万歳した。

「こうと判つてりゃ、来る時に何か買ってくるんだっただな。せめて釣り竿でもあれば琵琶湖に糸を垂らしてやるんだが」

「——ここには常駐のメンテ要員がいるはずですよ」

和久井助手が突然口を開いた。

(この人、必要な時しかしゃべらへんから緊張するわ)

萌黄はそう思いつつ、身体を向けて、

「それが何か？」

「ひよっとすると、その人たち専用の食堂があるかと思っ
いました」

久保田がポンと膝を打った。

「なるほど！ 考えられるな。わざわざ陸地くんだりま
で、飯食うために足を運ぶのも煩わしいしな」

「とすると」 萌黄は立体地図を覗き込んだ。「その人た
ちが住み込んでる事務所を見つければいいんやね」

「ウンウン」

久保田がにやりとしながら何度も頷く。和久井も久保
田の役に立ったことがうれしいのだろう。頬を赤らめて
いる。

「早速探そうぜ。早くしないとガソリンが切れちまう」

「隊長代理」

真崎は呼ばれて振り返った。彼の前に現れたのは、金
髪長身の隊員だった。軽薄そうな笑みを浮かべている。

おそらく当人はニヒルなつもりなのだろう。後ろに人相
の悪い隊員をふたり引き連れている。

「お前か。利根崎とかいったな」

「トニーです。じつは隊長代理にお願いがあつて参上し
ました」

「何だ」

利根崎は片えくぼを浮かべながら顎を引き、その暗い
目に妖しい光をたたえて言った。

「リアル狩りの先鋒を、俺たちに任せてもらえませんか
ね？」

「お前らが？」真崎を差し置いて、横合いからシュウが口をはさんだ。「リアルに叩きのめされたくせに、偉そうな口を叩くな」

利根崎とねざきが隊員たちの前でハジメから受けた辱めはずかしの一件を言っているのだ。ところが当の利根崎は、指摘されても気にならないという風情でニヤニヤしている。

「なんだ？」

シュウが不快な表情を浮かべて前に出ると、利根崎は及び腰になって、

「まあそうカリカリしないでくださいよお」

と媚びるような上目線を送ってくる。潔癖な性格のシュウには到底受け入れがたい種類の人間である。

「俺だって、やられっぱなしじゃいませんや。さつき、あのハジメとかいう小僧を締め上げてやりましたよ。ヤツは我慢できずに仲間のことを白状しちゃいましたね。

このWIBAには、萌黄の他にも、影松清香に齋藤っていうジイさんを連れて乗り込んできたらしいですぜ。後のふたりはこの反対側にあるヨットハーバーに隠れると言っていました。俺たち早速行って、取っ捕まえてきますよ！」

それまで黙っていた真崎が軽く手を挙げた。利根崎は口をつぐんだ。それほど彼ら隊員にとって真崎の存在は大きいのだ。

「お前のことだから、まともな拷問もできてやすまい。医者脅して自白剤を大量にぶち込ませたか、過度の電気ショックを与えるかしたんだろう」

真崎の言葉に、利根崎はいたずらを指摘された子供のように頭を掻いた。テレルのようなことでもないだろうと、シユウは歯ぎしりしたが、真崎は少しも気にしない様子で「ふむ」と顎に手をやると、

「行け」

と短く答えた。利根崎はパツと顔を明るくし、「了解」と叫び、他のふたりを促して、乗ってきた車に飛び乗り、WIBAのメインストリートを奥へと走り去った。見送ったシユウは眉をひそめながら、

「いいんですか。あんなチンピラみたいな連中を」

「人手不足の折りだ。猿でも使うさ。アイツだって名誉挽回のチャンスが欲しいんだろう」

そう答える真崎を、シユウは不思議そうに眺めて、「ずいぶんとあの若者に甘いですね」

「ああ」真崎は曖昧に頷いた。「奴は俺の遠縁に当たる。今となっては、たったひとりの縁者さ——誰にも言うなよ。俺も奴を特別扱いするつもりはない」

ないと言いながら、真崎の目はシュウがこれまでに見たこともないような温かみをたたえたように見えたが、すぐにそれを打ち消し、普段の厳しい顔に戻った。

「地下エリアの一部が開かないんだったな。真佐吉がそこに潜んでいる可能性が高い。我々はそこへ行くぞ」

ふたりの隊員を連れ、利根崎がヨットハーバーに到着した時、今朝まで係留されていたすべてのヨットはほとんどが破壊され、湖に沈められた後だった。

「兄貴、いませんぜ」

隊員のひとり、安藤が判りきったことを口にした。もうひとりの清水もキョロキョロするばかりで、どうにも役に立ちそうにない連中だ。

「フン。そんなこつたろうと思ったよ。まあ心配するな。手は打ってある」

意味ありげにウインクすると、利根崎は胸ポケットからレシーバーを取り出した。リアルキラーズ間の連絡用に使われているのは別物だ。

利根崎はマイクに向かって話しかけた。

「おい、聞こえるか、どうぞ」

《——ああ》

「早速だが、W I B Aに潜入したリアルどもの足取りはつかめたか？」

《———どうにかな》

「上出来だ。誰と誰だ？」

《———光嶋萌黄とその仲間二名。リアルは萌黄ひとりだけ。セントラルタワーから舞い戻った彼女は、仲間と合流し、現在ビル内の階段を降りつつある。どうやら地下に向かう模様》

男の口調は淡々と事務的だが、どこかぶつきらぼうで、利根崎に使われることに対して、不満を感じているような印象を聞く者に感じさせた。

「アンタ、萌黄たちを尾行中かい？」

《———当たり前だ。でなければこんな報告ができるものか！》

男の声が食ってかかった。利根崎は一瞬たじろいだだが、自分の顔をうかがう隊員たちの手前、虚勢で持ち直し、「判った判った。それじゃ俺たちもそちらに向かう。目を離すなよ」

《———言われるまでもない》

利根崎はレシーバーを胸に戻した。そして湖上を吹く北東の風に金髪をなびかせると、

「どうだ、俺にはとっておきの隠し球があるんだ。こいつをうまく使えば、リアルを捕まえることができるだろう。俺は今までの俺とは違う。トニー様の本当の才能を皆に見せつけてやる。さあ、WIBAのショッピング街

目指してUターンだ。行くぞ、アンデイ、ジミー！」

「安藤です」

「清水です」

萌黄、久保田、和久井は永遠に続くかと思える長い階段を、ひたすら下降し続けた。

踊り場に掛けられた時計は午後二時を指している。

「この建物は、百貨店になる予定なんですね」

萌黄が言うのと、久保田はちょうど通りかかったフロアを見ながら大きく頷き、

「さしずめこの階はレストラン街だろうな」

そこは通路がフロアの中央を縦断しており、左右にそれぞれ趣向を凝らした外観の店が軒を連ねている。当然ながら食べ物のおいしまったくない。人通りもなく、物音もしないフロアの眺めは、萌黄に薄ら寒いものを感じさせた。

「どうして照明がついてるんでしょう。誰もいないというのに」

和久井助手が当然な疑問を投げかけた。久保田はおそらくと前置きして、

「迷彩服の御一行が俺たちを捜しやすいようにするためじゃないかな」

「だとしたら——」

萌黄は天井の隅に顔を向けた。

「どうした？」

久保田が萌黄の視線を追うと、そこに監視カメラのレンズが光っていた。赤い光点が作動中であることを示している。

「どうしよう」

三人は顔を見合わせた。

萌黄の能力を持ってすれば破壊するのは簡単だ。しかしそれでは自分たちの所在をわざわざ敵に教えるようなものだろう。

「放っておくしかないか」

久保田が悔し気に言った時、

《ボクの出番かな？》

萌黄の手の中で、携帯のギドラが声を発した。

「いたのか。アンタにいい考えでもあるの？」

萌黄が当てにしないような口振りで言うと、

《あらいでか！》ギドラは三つの首をグルグルと回しておどけてみせた。が、すぐに真顔に戻り、《ちよつとだけ待っててね》

言い残すや、ドロンと煙を立てて液晶画面から消えた。ギドラが根拠もなく行動するわけではない。萌黄たちはじっと黙って彼の帰りを待った。

一分ほど経過したろうか。久保田がアツと声を上げた。

「カメラのLEDが消えた」

見るとその通りで、さつきまでついていた赤い点が見えなくなっている。

萌黄が携帯を見たのと、ギドラが液晶に戻ったのはほぼ同時だった。

《これでOKさ》

「どうやったん？」

《簡単なことだよ。頼み込んだんだよ》

「頼んだあ？ 誰に」

ギドラは萌黄の噛みつくような顔を見てさすがにもつたいぶつた言い回しはやめ、要領よく説明した。

《PAIだよ。このWIBAのセキュリティは従来のものとは大きく違って、個々の建物や施設はPAIを監視役として割り当てられているんだ。しかもこの未来の百貨店のような大きな建物は特別で、各階のフロアを子供のPAIが監視し、全体を親のPAIが統括している。ボクはその親PAIに談判してきたんだ。彼女は承諾してくれたよ。君たちが建物内にいる限りは、過去に録画した無人の映像をループにして流してくれるって》

「それはそれは……」

萌黄には他に言う言葉がなかった。

WIBAは最先端のハイテク実験場になっているらしい。まさかセキュリティまで全面的にPAIが担っている

るとは想像もしていなかったが。

いや、それ以上に萌黄を驚かせたのは、自分たちに対するギドラの貢献である。

(真佐吉のしもべかも？ という疑いは、わたしの妄想だったのかな？)

萌黄がカメラを見ながらそんなことを考えていると、

「それじゃ急ごうか」

久保田が萌黄の肩に手を置いて、先を促した。

三人は再び、長い階段を早足で降り始めた。

彼らのすぐ後ろを、忍者のような黒い影がひたひたとつけているとも知らずに。

12

カメラに撮られないならエレベータで行こう、という久保田の意見はギドラによって一蹴された。機械の動きおよび電気の流れは別に記録されるため、誰かがいることが敵側に伝わってしまうというのだ。

《それだけでなく、無人の百貨店でエレベータやエスカレータが動いてたら、イヤでも目立つしね》

三人は二十階の高さを、自分たちの足で黙々と降りていった。リアルパワーの持ち主・萌黄と、海の男・久保田はステップも軽く降り続けるが、和久井助手はつい遅

れ気味だった。

しかたなく萌黄は、時折踊り場で和久井を待つついでに、小脇に抱えたノートパソコンを広げた。画面では蟻のように散らばる赤い点が、W I B Aの平面図の上をそこかしこに動き回っていた。

リアルキラーズである。

彼らは非常に統制された動きで、広大なW I B Aの要所要所に分散しつつあった。どうやら死角をなくそうと
いう作戦らしい。

さらに、本土から渡ってきた複数の赤点集団が合体すると、メインストリートを五列縦隊になって堂々と進み始めた。

萌黄は迷彩服たちの行方を目で追った。行進は少し行くと、一団が本隊から外れ、地下昇降口に入っていた。さらにその百メートルほどさきで、また別の一団が枝分かれした。

おそらく彼らも、真佐吉は地下に潜んでいると考えているのだ。徐々に包囲網を狭めていくつもりなのだろう。(大丈夫なんかな。真佐吉さんのことやから、W I B Aのあちこちに罫を仕掛けてるんやろうし)

竣工直後の無人の湖上都市。真佐吉にとってこれほど好都合な玩具はないだろう。かといって萌黄にもW I B Aの全体像が把握できたわけではない。立体地図はあく

まで一般的な案内図でしかなく、深部では空白になっている部分があるのだ。それは主に地下、正確には海面下に集中している。ギドラにも調べさせたが、よく判らないという。

(むんが幽閉されてるとしたら、そこやるか)

萌黄はいつの間にか動いていた足をまた止めた。彼女はいま二階と三階の中間にいた。久保田たちはまだ三階に達していない。

「——ん？」

ふと見上げた萌黄の鼻の奥が、ツンと痛みを感じた。

(なんやろう?)

手の甲で小鼻を押さえながら、手すり越しに上を見た萌黄は、降りてきた久保田と目が合った。その久保田が口をアツと開くと、

「萌黄さん、後ろ！」

声に被さるように、背後で射出音がした。

萌黄が反射的に身体を横転させるのと、銃弾が階段にめり込むのがほぼ同時だった。

階段の側壁に背中を押しつけ、態勢を立て直そうと試みるが、銃弾は容赦なく萌黄に注ぎ始めた。

「久保田さん、隠れてて！」

萌黄は叫び、あわててイメージしたエアクッションで銃弾を払い落とすのが精一杯だった。

萌黄を狙う迷彩服はふたりいた。どうにかこの場を逃れようと思うが、連射の圧力はあまりに強く、萌黄の身体は階段に押しつけられっぱなしだった。

銃弾を相手に打ち返す自信はある。自宅で経験済みである。しかしサキの顔が脳裏にちらつくと、どうしてもそうする気になれない。

かざした両手の隙間から見ていると、敵の数がまたひとりで増えた。

（あれは確か、トニーとかいう奴！）

利根崎は手に持っていた物を萌黄に向かって投げつけたかと思うと、ふたりの迷彩服と共に商品がまだ陳列されていないショーケースの影に隠れた。

「えっ」

宙を飛んできたのは、黒くて丸い物体だった。何だろーと眺めていた萌黄の前で、その物体は突然爆発した。

轟音が辺りに満ちる。萌黄は爆風に吹き飛ばされ、踊り場の壁に叩きつけられた。肩と側頭部に痛みが走った。

「萌黄さん！」

久保田が叫んだ。

崩れた壁が細かい粒になって周囲に舞い上がった。粒の煙は萌黄の視界を奪い、激しく咳き込ませた。

（しまった！ 咳をするとこちらの位置が――）

急いで口を閉じたが遅かった。

第二波の手榴弾。その投げられた気配がした。煙の上に二個の黒い影が浮かび上がる。

踊り場に逃げる余地はない。萌黄は上階につながる階段に目を向けた。久保田が和久井をかばいながら駆け上がっていく。ちょうどその背中が、折り返す階段の陰に隠れるところだった。

萌黄は素早く空気の鎧よろいに身を包むと、下り階段目掛けて壁を蹴り、宙を飛んだ。

萌黄の身体は空中で手榴弾と交錯した。二個の塊が身体の左右をすり抜けていく。彼女はそれには目も留めない。

煙はまだ晴れていなかった。迷彩服のマシンガン攻撃も一時的に中断していた。爆風を避けているのだろう。それが萌黄の狙いどころだった。

(見えた!)

左にふたり。右にひとり。右の迷彩服が利根崎だ。

その時、階段で爆破音が鳴り響いた。三人ともそちらに気を取られ、天井に浮かぶ彼女に気づいていない。

萌黄は体を入れ替えると、フロアの奥に着地した。そして見えない空気の塊を手でつかむ真似をし、利根崎の背中に向かって投げつけた。

「な、なんだナンダ!」

利根崎は悲鳴に似た声を上げて背筋を反らした。彼は

両脇を身体にピッタリとつけるような格好で、床の上に転がった。

仲間の異変に気づいた他のふたりも、動こうとした瞬間、何かに囚われたように両足を硬直させ、利根崎に続いて床にごろんとひっくり返った。

萌黄は止めていた息を吐いた。

「う……うまいこといったあ」

萌黄はしばらく動けなかった。自分の策がみごと凶に当たったことに当惑を覚えながらも、ホツとして力が抜けたからだった。

三人は見えない縄で縛りあげられ、何が起こったのか理解できない顔をしてもがいている。

萌黄は油断なく辺りの様子をうかがった後、他に仲間はいないと判断して彼らのそばに近寄った。

「おい、光嶋萌黄！」

利根崎は無様な姿で叫んでいた。錐きりのように直立不動で固まっているのだから無様以外の何ものでもない。それでも精一杯の虚勢を張るように、大声で呼ばれる。

「こ、これで勝ったと思うなよ！」

「アンタって人は——誰も勝負しようなんて思てへん」
軽くいなすと、利根崎はますます顔を真っ赤にして吠えた。

「い、いいか？ お前の大切な仲間の命は俺が握ってる

んだ。俺に指一本触れてみる。仲間の命はないぞ！」

「ウソつかんとって。アンタみたいなヘタレに捕まる人がいるかつちゅーの」

すると利根崎はへへっと笑みを浮かべると、

「おい、T—800。あっちの様子を見せてやれ」

と自分の腰に呼びかけた。

(ていーはっぴやく?)

おそらくP A Iの名前だろう。そして出現したホログラフイ映像を見て、萌黄は「ああ」と理解した。それはS F映画『ターミネーター』に出てくるアーノルド・シュワルツェネッガー演じるサイボーグだった。サンダラスをかけたのかつい髪型のシュワちゃん、厚い胸板の前に掲げていたテレビのスイッチをおもむろに入れた。映像が流れ始め、若い迷彩服の顔が映った。

《——利根崎さんですか?》

どうやら、どこかからの中継映像らしい。

「そうだ、そっちの様子を教えろ」

《——様子って言われても、ここで捕虜の監視をしてるだけです》

「判ってる! 黙って捕虜の映像をこちらに送れ」

映像が動き始めた。携帯を持った迷彩服が歩いているのだ。廊下を過ぎ、ある部屋の扉を開けて中に入ると、そこにはいくつつかのベッドが並んでいた。

そのひとつに寝かされているのは――

「むん！」

萌黄は愕然とした。両手足を手錠でベッドにくくりつけられているのは、まぎれもなくむんだった。

「どう……して？　なんでむんがアンタなんかに」

カメラが横に動いた。並んだベッドには、五十嵐と伊里江の姿もあった。

「ヒデえな、アンタなんかとは。さあ早いとこ、この空気の縄を解いてくれよ。さもないとお友達が痛い目にあっちやうよオ？」

13

全身の血が逆流した。萌黄は明白な殺意を視線に込めて、倒れている利根崎を睨んだ。

「ア痛たたた」

利根崎は身体を捻るねじるようにして苦痛を訴えた。萌黄の怒りが彼を拘束するエアロープを引き絞ったのだ。

「SMの女王にでもなったつもりか、コラア！」

利根崎の減らず口は続く。萌黄の目はますます白くなり、利根崎の身体がミシミシと音を立てた。

「クッ、やめろ！　でないとお前の友達は死ぬぞ！」

「アンタも死ぬよ!!」

もはや冷静さを失った萌黄は、激情に駆られて、一層力を込めて締め上げる。男の顔は真っ赤に膨れ上がり、今にも眼球が飛び出しそうだった。

「ひ、ひいらぎ！」

利根崎がわめいた。

(柎?)

萌黄はその名前にぎよつとした。

「助ける！ そこにいるんだろ!？」

利根崎を潰しかけた萌黄の力は、一瞬にして霧散した。萌黄は目を大きく見開いて、長身の僧の姿を探した。

二階の広いフロアには白い布の掛かったショーケースが、いつでも商品陳列できるように並べられている。

「いてへんやない」萌黄は静かなフロアから利根崎に目を戻し、再び怒りを増幅させた。「いい加減なことばかり言うて、だいたいあの人アンタらの味方になるわけないわ！」

「それが——ないこともないんだな」

ふいに階段の上から苦笑混じりの声が落ちてきた。

振り仰ぐ萌黄。すると柎拓巳がそこにいた。柎は久保田と和久井を引っ立てながら、ゆつくりと萌黄のほうに降りてくる。

「ああ良かった。早くこの娘をとつちめてくれ！」

利根崎は床の上から柎に救いを求めた。その口調から

はさつきまでの必死さは消え、まるで子飼いの用心棒に命令する主人のような横柄さがにじみ出ている。

柘はそんな利根崎のことなど無視し、萌黄に対して鋭い眼光を向けていた。

「まだ姿を出すつもりはなかったんだが」

柘は聞こえよがしに舌打ちした。

久保田たちは踊り場に捨てるように倒されている。もがきかたからして、萌黄と同じようにエアロップの技を使ったのだろう。

「真似しい」

「なんだって？」

「特許料、よこし」

萌黄は柘に手を差し出した。柘はようやく気づいたように後ろを振り向いた。

「君の独創性に敬意を表したのさ」

「屋上からずっとわたしたちを尾行してたでしょ」

「気づいてたのか。ハハハ、さすがだ」

柘の顔は言葉ほど笑っていない。緊張感がいやが上にも高まる。

「どういうこと？ あなたは真佐吉さんと共闘するって言うてたのに、どうして迷彩服と？」

「都合が良ければ悪魔とも杯を交わすさ」

「彼らはリアルな敵やんか」

萌黄はチラツと利根崎たちを見た。エアロップはまだ効いているが、柊と闘うとなれば彼らを解放しなければならなくなる。

「俺が付いたのは奴らじゃない。コイツらは——」
と柊は階段の下に到達すると、利根崎のそばに歩み寄り、彼の尻を足蹴にした。

「コイツらは今でも敵だ。いずれまとめて潰す。だが俺の描いた野望を実現するため、伊里江真佐吉以上に強力な仲間が現れたんだよ」

「仲間？」

「そうだ」柊はここでようやく微笑んだ。「最後の同志。または、十二番目のリアル」

萌黄はハツとなり、頭の中で素早く数え直してみた。

ハモリを含む四人のリアルは既に亡くなっている。だから残りは八人。

影松清香。

ビツグジヨーク齋藤。

小田切ハジメ。

五十嵐寛壽郎かんじゆんろう

駿河炎。

柊拓巳は目の前にいる。

そして自分自身、光嶋萌黄。

以上、生存し、名前の確認できるリアルは七人。

(そやあとひとり足らへんかったんや)

萌黄は心底驚いた。柘は、最後のひとりが今こそ現れたと言っているのだ。

「興味ある話だろう。フッフ」

柘は幾分くだけた動作で手近な陳列台に腰かけ、萌黄にも座るよう促した。しかし彼女は無言で断った。

「彼——そう、十二番目のリアルは男なんだが、彼は俺にこう言った。『真佐吉はいずれ滅びる。その後の世界は君の好きなようにするがいい』と。どうだ、話せる奴だと思わないか？」

「どこにいるの？ その人の名前は？」

萌黄は畳み掛けた。その人物の発言よりも、正体のほうが百倍、気になる。

しかし柘は困った顔をした。

「彼は正体を明かしたくないと言ってる。バレると自由に動けなくなるとの理由からな」

「それやったら信用でけへん。あなたのでまかせかもしれへんし」

「教えたら、俺の話に乗ってくれるかい？」

「……………」

「君も大学でお世話になった人物さ。そう言えば判るだろう？」

萌黄の頭に人物写真が次々と浮かんだ。そしてその

真っ先に浮かんだ人物がいた。

「ウソでしょ？」

「本当さ。助教授の野宮甲太郎氏だよ」

14

「あの野宮先生が……」

萌黄は記憶の中に残っている助教授の映像を、全シーン早送りで再生した。野宮がリアルのひとりだということのとんでもない発言を否定したかったのだ。

「先生はわたしらを大学に迎えた時、あんまりいい顔してなかったみたいやけど」

「リアル同士、相手に感づかれるのを恐れてたんじゃないかな。俺の想像だけど」

そうなのだろうか。萌黄にはまだ納得がいかない。

「そうやとしても、転送装置で帰ろうとした時に、教えてくれてもよさそうなもんやわ」

「俺だってそう言ってやった。そしたら『研究所のトップがリアルでは周囲の信頼を得ることはできず、研究スタッフから外されることが予想された』と言いつつ」

（だからって、味方までだますなんて）

心の中でそう非難しながらも、自分が野宮の立場ならそうしたかもしれないと萌黄は思った。笹倉防衛庁長官

のへリアルを殺せ」発言などを思い出せば、野宮の心情は察するに余りある。

とはいえ、理屈では理解できても、気持ちの上では容易に受け入れることができない。あのとき助教授は、全員を元の世界に送り返した後、実は私もリアルでしたとカミングアウトして装置に飛び込むつもりだったのだろうか？

「証拠は見せてくれはったんやろね」

「ああ、真っ先に訊ねたよ。あの焼け焦げた観覧車の前でね。すると助教授はやってみせやがった」

「？」

「得意のガム飛ばしだ。彼は次から次へと狙った的に命中させた。最後は俺の眉間にまでペタリとね！ 思わず女みたいな悲鳴をあげてしまったがな」

萌黄は野宮の非衛生的なその技を思い出した。逃げる山下研究員の背中に見事命中させた芸当は決してまぐれではなかったのだ。小耳にした話では、毎朝職場に向かう途中で必ずこれをやっているのだという。「大学の先生ともあろう人が、なんて子供じみたことを」と聞いた時は眉をひそめたものだが、あれがリアルパワーによるものだとしたら、行儀の話は別にして、リアルだということに頷けないこともない——なんてワケはない！

「もちろん決定的な証拠も見せられた」柊は先回りして

言った。「彼は持っていたナイフを自分の腕に走らせた。するとパツクリ開いた傷口が気合いと共に塞がったよ。皮膚の上に、砂にならない赤い血を残してね」

萌黄はぞつとした。それが本当ならまぎれもなくリアルだろう。でも、あまり想像したくない光景だ。あわてて話を移す。

「野宮先生とはどんな話を？」

「そう、大事なそこだ」

柊は、さながら商売人のようにパンと合わせた手をもみ始めた。表情も喜色を取り戻している。

「野宮さんには真佐吉を一気に屠ほぶる秘策があるらしい。そのためには陰ながら俺の手助けが必要だ、とこう言うんだ。だから俺は取引の相手を真佐吉から野宮さんに変更した。彼とは大学にいる時に信頼関係を築いていたからね」

どうせまた野宮を丸め込もうと、僧のフリを演じたに違いない。

だましたり、だまされたり。萌黄は憂鬱ゆううつに気分になった。

「野宮さんは、今日か明日にもその秘策を実行する。だから手段を問わず、至急リアルたちを集めろというのが、俺に与えられた使命なんだ」

「集めてどうするの？」

「決まってるじゃないか。真佐吉を退治したら、奴の隠し持つてる転送装置を使つて、すぐさま元の世界に送り返すためだ」

「……………」

「でも俺は残る。そして君にも残つてほしい」

「しつこい！ わたしは帰るで！」

「つれないなあ」

柊は腰を上げた。萌黄は一步引いて身構える。

するとそれまで様子をうかがっていた利根崎が、床の上から声を張り上げた。

「なあ、柊。俺を助けてくれるよな？ この縛めを解いてくれるよな？」

柊は冷たい目で利根崎を見おろした。

「アンタらとの関係はこれまでだ。もともと今朝捕まえた連中をエサに、萌黄さんを誘導するだけの役割だったんからな。それさえできなかつたアンタらは、もはや用済みだ」

「それじゃあ、汚名返上のチャンスがなくなつちまう」

柊は、知らないねと冷たい視線で答え、

「アンタは最後のリアルが誰なのかというトップシークレットを耳にした。悪いが消えてもらうよ」

それを聞いた利根崎の顔がみるみる恐怖に青ざめた。

動かせるのは首から上と足首だけで、逃げようにも逃げ

られない。

柊が両手を突き出すと、利根崎はさらに恐慌をきたし、歯をカタカタと鳴らした。

「待つて！」

萌黄が声をかけると、柊は両手を掲げたまま、顔を萌黄に向けた。

「ん？ 考え直してくれたのかな？」

萌黄は答えず、指先を額につけて、沈黙考の姿勢をとった。ふいに吹き出してきた汗がいくつもの流れになつて首筋を落ちていく。

どうしたらええのん？

思いがけない事態が連続して起き、思いもしなかった情報を矢継ぎ早に聞かされた。それで急に態度を決めろと迫られても、うまく考えがまとまるわけがない。

フロアにひんやりした空気が流れた。

遠くからかすかに人の足音が聞こえてくる。リアルキラーズたちはかなり近くまで侵攻してきているらしい。

「どうした？ もう時間がないぞ」

柊がイライラした声を飛ばす。

萌黄はようやくやく瞼を開いた。その瞳に迷いの陰はなかった。

「むんのところに連れてつて。むんを無傷で釈放してくれるなら、そちらの要求は飲んであげるわ」

「懸命な判断、感謝するよ」

前言を撤回した萌黄の心理を推し量ることなく、柊はにっこり笑って彼女を手招きした。萌黄は相手のリズムに乗るのを嫌って首を横に振り、

「この人たちは許したってな」

「ん？ さっきは死ねとか言ってなかったっけ？」

「……………」

「殺しはしない。だが放免するわけにもいかないな。君の連れと合わせて、どこか空いた部屋にでも閉じ込めておくか」

柊は階段のそばに戻り、壁際に立て置かれたパーティションを動かした。そこにひとつの扉があった。〈従業員専用〉のパネルが貼りつけてある。

「おあつらえ向きだ。この中でしばらく眠っていてもらおう」

そう言って柊はドアノブに手を伸ばした。ところがその手がノブに触れるかと見えた瞬間、ノブが左にググツと移動した。

「——！」

柊は二、三度目をしばたたかせた。何が起きたのか理

解できなかった。そしてもう一度ノブをつかもうとした。ノブはその手をもかいくぐって、今度は右に移動した。

「????」

再々度つかもうとする。またまたするりと逃げていく。柎はウガーツと叫んで扉から身体を離した。

「何の仕掛けだ!? 俺をコケにしやがって!」

柎は腰を引くと、反動をつけて扉を思い切り蹴った。

だが扉はびくともせず、蹴った柎は足を押さえて顔をしかめた。

「こ、これは扉なんかじゃない!」

そう言った途端、スーツと扉は消えた。そこには周囲と同じ壁があるだけだった。

(液晶——この建物は内壁も外と同じく、液晶画面でできてたのか)

扉に見えたのはホログラフィ映像だったのだ。おそらくこの百貨店が開店したあかつきには、壁面を優雅な模様が泳ぐことだろう。それとも店内を案内する動画を映したり、まるで森林の中にいるような自然の風景を映写したりするのだろうか。しかも立体映像で。

「ナメた真似してくれるじゃないか。これも真佐吉のしわざか!」

はじかれたように萌黄は顔を上げた。そうだ、こんなことができるのは彼以外にいない。すると真佐吉はこれ

までの柗とのやりとりをすべて聞いていたのか？

驚きが治まる間もなく、ガーツと音がして階段の右並びに並ぶエレベーターのひとつが開いた。現れたのは十人ほどの見知らぬ男たちだった。背広姿、Tシャツにジーンズ、体育教師のようなジャージとまぢまぢだ。迷彩服は混じっていない。

「お迎えに上がりました」

先頭に立った紺の背広に空色のネクタイの男が口を開いた。眼鏡の奥の目が萌黄と柗を交互に眺める。

「誰？」

萌黄が訊ねると、

「伊里江真佐吉の代理です」

と答えた。

「おい！」柗は背広の男ににじり寄った。「代理だか何だか知らないが、いまいいところなんだ。アンタらの出番じゃ——グツ」

柗がうなじに手を当てた。指のあいだから十センチほどの細長い棒状のものが見える。柗は口をぱくぱくと動かしたかと思うと、床の上にどうつと倒れた。棒は首筋に刺さったままだ。萌黄が反対側に首をめぐらせると、構えていた銃を降ろす別の男がいた。

「強力な麻酔銃です——光嶋萌黄さんですね？」

背広の男が事務的な声で訊ねる。

「——はい」

「よかった」男は緊張した表情を若干緩めると、萌黄に深々とお辞儀した。「どうぞ、私どもといっしょにお越し下さい。真佐吉がお待ちかねです」

「え……お待ちかねって……」

階段の上では久保田と和久井が、ようやく柵の呪縛を逃れることができ、立ち上がろうと身体をさすっていた。対照的に床に転がった利根崎ら三人組は、エアロープにくくられたまま依然としてジタバタもがいている。

「真佐吉が招待しているのは、あなただけです」

背広の男は、慇懃いんぎんだが有無を言わせぬ口調で言った。

そして彼の後ろから前に出たふたりの男は、萌黄をはさむようにして左右に立った。どちらも肩からマシンガンを下げている。

自分だけなら対処のしようもあるが、バーチャルの仲間が巻き添えを食っては……。

「久保田さん」萌黄は呼びかけた。「むんのこと、よろしくお願いします」

「判った！」

久保田は頷きながら二段飛ばしで階段を降りてくると、頭から手拭いはずして細く切り裂いた。ロープの代わりには利根崎を縛るつもりなのだ。萌黄が去ればエアロープは自動的に消える。それを見越しての行動だった。

萌黄は信頼の眼差しを久保田に送ると、男たちに囲まれてエレベーターに乗り込んだ。扉が閉まる。

箱はすぐに下方へと動き始めた。思ったとおり真佐吉のアジトは地下にあるらしい。

操作盤の地階表記は五階までしかない。ところが萌黄たちを乗せた箱は、地下五階に達してもスピードを緩めない。ランプはへ5で止まったままにもかかわらず。

(いよいよ地図にないエリアや)

萌黄は手の平の汗をTシャツで拭った。

いよいよ本物の真佐吉と対面できるのか？

「坊主、何か用か？」

小学校の校門の内側で見張っていた男は、近寄ってくる車椅子の少年に問いかけた。

『すいません、WIBAへはどの道を行けばいいのか教えてくださいませんか』

「ああ？ 君はひとりか？ 保護者はいないのか？」

『いません』

別の見張り番が横から覗き込んだ。

「コイツ、唇を動かさずにしゃべってるぞ」

「坊主、ここは坊主ひとりであらうついていい場所じゃないんだぞ」

「——おいどうした」

さらに数人の迷彩服が集まってきた。

「この少年がW I B Aに行きたいんだとさ」

「ダメだダメだ、あそこはいま一般人の入場を禁じている」

「——待てよ」迷彩服のひとりが緊張した声を上げた。

「コイツはリアルじゃないのか？」

「アッ、そういうえば京都の大学で見たことがある」

「坊主！ お前、あのリアルだろ？」

『——だったらどうなんだよ！』

車椅子の少年は駿河炎だった。口調ががらりと変わったので、居並ぶ迷彩服たちは一斉に驚いて顔を見合わせた。

『早く教える、W I B Aはどっちだって訊いてんだよ』

「——坊主、お前、中にいる仲間を助けにきたんじゃないのか？」

と、ひとりがアゴで後ろの校舎を示した。

『仲間？』炎少年のクククと笑う声がスピーカーからこぼれた。サングラスをかけてきちんと座った当人の表情はピクリとも動いていない。『俺に仲間なんかいない』迷彩服たちは、ザザッと炎を取り囲んだ。

「話はず中で聞こう——おい、連行しろ」

だが次の瞬間、迷彩服たちは炎のリアルパワーによってはじき飛ばされていた。

「くそっ」

ひとりが腰の拳銃に手を伸ばすと、他の隊員たちもそれにならって身構えようとした。

キイイイーン。

突然、空気を切り裂く音が周囲に満ち満ちた。迷彩服たちはあわてて耳を押さえ空を見上げた。ジェット機が飛来したのかと勘違いしたのだ。

音源は炎少年のスピーカーだった。超高周波が絶え間なく流れ出している。迷彩服たちは銃を向けるどころか、刺すように鼓膜を刺激する音に七転八倒している。中には早々と気絶する者もいた。

数分後、音は消えた。しかし立っている者はひとりもいなかった。

『ちえっ、張り合いないなー』

炎少年は車輪を返すと、ゆっくりと校門を出ていった。そのまま塀沿いの道を進む。別の敵が現れたらどんな手で倒してやろうかと考えているうちに、見覚えのある四輪駆動車がやってきた。

「少年！ うまくやったな」

運転席から降りてきた雛田がねぎらいの言葉をかけた。

『つまんなかった。アイツら弱すぎ』

「まあ、また活躍の場はあるさ。さあ乗ってくれ」

そう言って後部ドアを開いた。リフトがせり出してきた

て、少年を車椅子ごと車高の高さまで引き上げる。炎の母親はずっと心配そうな顔をしていたが、無事な息子を見てホッとしたようだ。

「お客がいるから少々狭くなった。我慢しろよ」

ミドルシートにもたれた五十嵐、伊里江真佐夫、そしてむんの後頭部が見える。炎はがっかりした。

『萌黄さんはいなかったのか……』

「なんだって？」

雛田が車を発進させながら訊ねる。

『独り言だよ。アンタはハマしなかったんだな』

「校庭の裏門は手薄だった。お前が引きつけてくれたおかげで無人になったしな」

メデタイメデタイと、ダッシュボードのカバ松が短い両腕でペチペチと拍手した。

《カゲにしては上出来だ》

「見てただけのくせに、エラそうな」

《元はといえば、オレがコンビに立ち寄って食い物がなにか確かめてこいと意見したからだぞ》

「偶然そこで出くわした迷彩服相手に、俺がうまく話しかけたからだ」

《口の軽い奴だったのがラッキーだったんだ》

「俺の話芸のなせる技だ」

カバ松は大きな口を開けてケタケタと笑い転げた。雛

田は不快に顔をシワ寄せた。

「ずいぶん陽が傾きましたね」

炎の母親が助手席で誰に言うともなく言葉を口にした。「どこかWIBAの見えるところで、今後の行動計画と立てましよう。助けた仲間も養生させたいし」

雛田は知らなかったが、むんたちが軟禁されていた小学校は、彼女らが潜んでいた家のすぐ裏手にあった。萌黄が助けに駆けつけたとき、親友はすぐそばにいたのだ。「見えた！ あれがWIBAか」

雛田は目をすがめて、湖上のビルを観た。

《近距離で眺めると、なかなか壮観だな》

「清香はあそこにいるのか……」

WIBAの背後を、黒い雲が覆い始めていた。それは残された時間に、彼らの身に振りかかる試練の重さを予感させた。

〈第二十章につづく〉